

十二支別出生性比の変動に関する一考察

坂井 博 通

1. はじめに

十二支のある年に生まれる女子を嫌う言い伝えが、届け出出生性比に影響を及ぼしていることはすでに報告されている（たとえば、丙午や五黄の寅の高い性比）。それは、親による届け出の調節によってもたらされているとされている。また、五黄の寅に限らず、普通の寅年においても性比が上昇していることが観察されている¹⁾。

しかし、十二支別の出生性比に関する組織的な観察は今までなされてこなかったに等しい。出生性比の研究は、性別決定のメカニズム解明にも影響を与えうる重要な領域である。また親が、子供の性別により出生年を調節するという現象は、性別選好の研究の一領域として位置づけることもできる。

したがって、本稿では、入手しうる限りのデータを用いて、十二支別の出生性比の変動を考察することにする。

2. データ

データは、厚生省大臣官房統計情報部『人口動態統計』の男女別年次別月別出生数を用いる。観察年次は、1899年から1986年までとする。言うまでもなく、出生の届け出遅れの問題があるが、本稿では届け出自体を問題としたいため、修正を施すことなく用いることにする。

また、届け出遅れの出生性比の時系列変動は、全体としては、届け出出生性比よりも小さな値をとりながらも、その傾向は届け出出生性比の変動と同様であるとも指摘されている²⁾。

3. 結果

十二支別に出生性比を示してもその差異は、なかなか明瞭にはならない。よって、ここでは隣接する年の出生性比の差により観察を行う（表1）。その符号から観察すると、一貫する傾向が見てとれる。すなわち、「寅>丑」、「寅>卯」、「辰>卯」、「辰>巳」、「午>巳」、「酉>戌」、「亥>戌」、「亥>子」である。寅の性比が高い傾向はすでに指摘されているが、辰や亥も高い傾向があること、また卯、巳、戌が低い傾向にあることが新たに見出された。

1) 以下の文献を参照のこと。

村井隆重、「ひのえうま総決算」、『厚生指標』、第15巻第5号、1968年、pp.3-9。

臼井竹次郎・方波見重兵衛・福富和夫・永井正規・金子功、「出生性比の統計」、『公衆衛生院研究報告』、第29巻3・4号、1980年、pp.149-177。

臼井竹次郎・方波見重兵衛・金子功、「九星干支と出生の性比」、『公衆衛生院研究報告』、第26巻2号、1977年、pp.76-84。

2) 臼井竹次郎・方波見重兵衛・永井正規・金子功、「月別出生の性比」、『公衆衛生院研究報告』、第28巻3・4号、1979年、pp.148-166。

表1 年次別出生性比の差

| 年次/干支 | 子-亥 | 丑-子 | 寅-丑 | 卯-寅 | 辰-卯 | 巳-辰 | 午-巳 | 羊-午 | 申-羊 | 酉-申 | 戌-酉 | 亥-戌 |
|-----------|------|------|------|-------|------|-------|------|-------|------|------|-------|------|
| 1899-1910 | -8.3 | 0.1 | -2.6 | 3.6 | -0.7 | -24.7 | 60.1 | -59.5 | 19.0 | -5.5 | -1.9 | 1.1 |
| 1911-1922 | 1.4 | 3.1 | 4.6 | -6.8 | 0.6 | -0.6 | 0.4 | 5.9 | -3.4 | 0.1 | -5.1 | 3.8 |
| 1923-1934 | -1.5 | -7.7 | 23.2 | -21.2 | 6.9 | -4.0 | 13.6 | -10.4 | 7.2 | 2.4 | -10.7 | 9.9 |
| 1935-1946 | -2.4 | -0.7 | 8.6 | -7.5 | 1.6 | -2.9 | 3.7 | 1.4 | * | * | * | * |
| 1947-1958 | 0.2 | -9.8 | 12.4 | -11.1 | 2.7 | -0.5 | 9.9 | -3.7 | 0.1 | -0.5 | -2.8 | 3.0 |
| 1959-1970 | -2.0 | 3.7 | 1.6 | -4.5 | 2.4 | -5.9 | 23.3 | -23.3 | 18.0 | 0.9 | -0.6 | -4.2 |
| 1971-1982 | -2.1 | -2.8 | 2.0 | -2.6 | 0.4 | -1.3 | -0.8 | 1.9 | -1.7 | -1.1 | -4.2 | 2.2 |
| 1983-1987 | -2.5 | 1.6 | 3.0 | -1.0 | | | | | | | | |

資料：厚生省大臣官房統計情報部『人口動態統計』

注1) 年次別出生性比は、女児1,000に対する男児数で計算した。*はデータ入手不能を示す。

4. 考察

4-1 性比の年次変動と月別変動の関係について

年次別の性比変動に十二支別による組織的な差異が見出されたが、まず、どの月の性比変動と関係が深いかを見てみよう。届け出時期を大きくずらすことは非常に困難であると考えられるため、12月や1月の性比変動が年次変動と関係が強いと予想される。

表2は、年次別の変動とどの月の変動が一致しているかを見るために、まず年別と年月別のそれぞれに関して、隣接する十二支別出生性比の差をとり、次にプラスの値を数えあげたものである。この指標は、年別の値と月別の値が類似しているほど、また、全体としては、右欄の差の絶対値の合計が小さいほど、十二支を基準とする年別と年月別の出生性比の動向が類似していることを示す。

その結果、予想通り、1月と12月の変動が年変動と類似していることが示唆された。

また、表3は、年変動と最も類似していると考えられる1月に関して表示したものである。非常に動向が類似していることがわかる。以上の結果は、1月や12月のいくらかの出生届け出の作為が、出生性比の年次変動にも大きく影響を与えていることを示唆するものである。

表2 性比の差のプラスの数

| 十二支 | 子 | 丑 | 寅 | 卯 | 辰 | 巳 | 午 | 羊 | 申 | 酉 | 戌 | 亥 | 計 | |
|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 年間 | 2 | 3 | 7 | 0 | 6 | 0 | 5 | 2 | 4 | 3 | 0 | 5 | — | |
| 月 | 1 | 4 | 4 | 7 | 0 | 6 | 2 | 6 | 1 | 4 | 2 | 1 | 5 | 9 |
| | 2 | 3 | 2 | 3 | 5 | 4 | 4 | 5 | 1 | 3 | 2 | 3 | 4 | 24 |
| | 3 | 3 | 5 | 5 | 2 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 1 | 2 | 5 | 22 |
| | 4 | 4 | 3 | 3 | 4 | 5 | 3 | 4 | 4 | 3 | 3 | 2 | 2 | 23 |
| | 5 | 6 | 3 | 3 | 2 | 5 | 1 | 6 | 6 | 5 | 2 | 3 | 2 | 25 |
| | 6 | 3 | 4 | 3 | 2 | 3 | 5 | 3 | 3 | 4 | 2 | 2 | 2 | 25 |
| | 7 | 1 | 4 | 4 | 1 | 5 | 5 | 3 | 5 | 2 | 4 | 2 | 4 | 23 |
| | 8 | 5 | 2 | 4 | 1 | 3 | 5 | 2 | 4 | 2 | 5 | 1 | 3 | 28 |
| | 9 | 3 | 3 | 5 | 1 | 4 | 1 | 3 | 3 | 3 | 4 | 2 | 3 | 16 |
| | 10 | 2 | 5 | 4 | 4 | 1 | 5 | 5 | 1 | 3 | 3 | 2 | 4 | 24 |
| | 11 | 4 | 3 | 4 | 4 | 1 | 2 | 5 | 3 | 3 | 2 | 3 | 4 | 23 |
| | 12 | 2 | 2 | 5 | 1 | 5 | 0 | 6 | 1 | 4 | 1 | 2 | 3 | 13 |

注1) 年次別性比、月別性比が入手可能なものについて計算した。

注2) 「十二支」の子は、「子-亥」、丑は「丑-子」、寅は「寅-丑」……を示す。

注3) 右欄計は、たとえば1月については、 $|2-4| + |3-4| + |7-7| + \dots + |5-5| = 9$ を示す。

表3 1月の出生性比の差

| 年次/干支 | 子-亥 | 丑-子 | 寅-丑 | 卯-寅 | 辰-卯 | 巳-辰 | 午-巳 | 羊-午 | 申-羊 | 酉-申 | 戌-酉 | 亥-戌 |
|-----------|-------|------|------|-------|-------|------|------|--------|-------|-------|-------|------|
| 1899-1910 | * | * | * | * | -18.7 | 1.7 | 27.2 | 3.8 | -31.1 | -9.1 | -4.1 | 5.5 |
| 1911-1922 | -10.8 | 14.3 | 1.9 | -40.6 | 21.8 | 14.4 | * | * | * | 9.5 | -12.4 | 1.5 |
| 1923-1934 | 0.5 | -1.5 | 43.8 | -76.6 | 32.8 | -0.2 | 43.5 | -45.0 | 3.4 | -18.5 | -23.0 | 36.1 |
| 1935-1946 | -2.7 | 2.0 | 27.2 | -54.6 | 29.0 | -5.7 | 24.5 | -3.2 | * | * | * | * |
| 1947-1958 | 8.7 | -9.7 | 60.0 | -86.8 | 50.0 | -9.2 | 38.6 | -39.7 | 4.0 | -13.1 | -1.4 | 8.2 |
| 1959-1970 | 5.9 | 3.6 | 27.7 | -35.9 | 28.9 | -7.0 | 51.7 | -118.1 | 79.5 | 4.9 | -2.1 | -7.2 |
| 1971-1982 | 1.1 | -2.1 | 8.9 | -13.8 | 7.3 | -7.0 | 3.9 | -9.7 | 8.9 | -4.6 | 0.3 | 9.0 |
| 1983-1986 | -14.5 | 4.2 | 8.2 | | | | | | | | | |

資料：表1と同じ

注1) 月別出生性比は、女兒1,000に対する男児数で計算した。*はデータ入手不能を示す。

4-2 “Gender Schema”による解釈

さて、では、なぜ辰や亥にも大きな出生性比が観察されるのであろうか。

親が子の誕生に際し、まず気にかけることは、子供の性別である。また、誕生後には、その性別にふさわしい名前を決めることに気を使う。そして、多くの親は、現在でも「男子は男らしく、女子は女らしく」育てたいと願っている。また、日本人は、国際的にも「男の子らしさや女の子らしさ」を大切にしたい傾向が強いことも示唆されている³⁾。

また、Bem (1985) は、人間がいろいろな対象に接するとき、対象が持つ様々な性質を無視して、単純に「女性的なもの」とか「男性的なもの」に分類してしまう認知の枠組みに注意を向けて、それを“Gender Schema”と名付けた⁴⁾。十二支の動物は、比較的広く知られる動物であり、具体像も浮かびやすいため、“Gender Schema”を抱きやすいと考えられる。実際、日本の昔の絵巻きでも、また、最近の一般の占いの本においても、十二支は一貫する性別のイメージで描かれていると思われる⁵⁾。

したがって、かなり一貫する性比の十二支変動を“Gender Schema”によって、すなわち、親が、誕生した子供の性別に合った十二支の年を選んで出生届けを調節するという現象によって、説明することが可能であると思われる。

そこで、まず十二支の“Gender Schema”の程度を把握するために、十二支の性別イメージを尋ねてみた(表4)⁶⁾。

すると、戌と子を除くと非常にはっきりした性別イメージがあることがわかった。そして、従来性比が高くなると言われている寅、また辰や亥も男性イメージとなった。また、逆に、相対的に低かった卯、巳、戌のうち、戌はあいまいであるが、卯、巳は女性イメージとなった。

3) 以下の文献を参照のこと。総理府青少年対策本部、『国際比較 日本の子供と母親』、昭和56年、総理府青少年対策本部、『国際比較 日本の子供と父親』、昭和62年。

4) Bem S. L., “Androgyny and Gender Schema Theory”, Vol.32, Nebraska Symposium on Motivation, 1985.

5) 梅津二郎、岡見正雄編、『新修日本絵巻全集18 男衾三郎絵巻他』、角川書店、1979年の中の「十二類合戦絵巻」(1450年頃)においては、辰が雄雄しく他の十二支をおさえ、また、虎は大きな態度をしており子や卯は、弱々しく描かれている。また、黄小娥『十二支 生まれ年がきめる男女の相性と金の運』、光文社、昭和42年では、羊年の女性は「小ぶとりで色白である」とか、卯の女性は「鋭い色彩感覚に恵まれており、ムード派です。そして、ホステス役、世話役として重宝がられる」というような表現が多々見られる。

6) 男子大学生18人に尋ねた。方法は、隣接する干支12組を並べて、どちらの動物が「女性的」であるかを尋ねる質問の形をとった。

表4 12支の男女イメージ

| 十二支 | 子 | | 丑 | | 寅 | | 卯 | | 辰 | | 巳 | | 午 | | 羊 | | 申 | | 酉 | | 戌 | | 亥 | |
|--------|----|---|----|----|---|---|----|----|---|---|----|----|---|---|----|----|---|---|----|----|---|----|---|---|
| イメージ | 14 | 8 | 10 | 15 | 3 | 1 | 17 | 17 | 1 | 2 | 16 | 11 | 7 | 1 | 17 | 16 | 4 | 1 | 17 | 15 | 3 | 13 | 5 | 4 |
| 年間 | 6 | 4 | 4 | 7 | 1 | 1 | 7 | 6 | 1 | 0 | 7 | 6 | 1 | 3 | 4 | 4 | 2 | 3 | 3 | 0 | 6 | 5 | 1 | 2 |
| イメージ性別 | ? | | F | | M | | F | | M | | F | | M | | F | | M | | F | | ? | | M | |

注1) 「イメージ」については、たとえば、寅：卯=1：17は、寅と卯を比較すると寅の方が女性的と答えた者が1名、卯の方が女性的と答えた者は17名いたことを示す。

注2) 「イメージ性別」は、イメージの一対比較の結果から、男性的であればM、女性的であればF、どちらかはつきりしない場合は?と示した。

注3) 「年間」については、たとえば、寅：卯=1：7は、年次別出生性比が、寅<卯の年が1件、寅>卯の年が7件あることを示す。

しかも、丑から酉までは、男女イメージが交互に現れる。もしも、一方の性別イメージが連続する場合には、届け出により、子供の性別に合った十二支を選択することはないと考えられるが、十二支の男女イメージが、以上のように交互に繰り返されることが多いため、親が、年の境目に誕生した子供の出生年を“Gender Schema”により調節することは可能であると考えられる。

そして、十二支のうち、性別イメージのあいまいな2つの隣接年次においては、実際の性比も、一貫した差を示さなかった。さらに、イメージと正反対の方向を示すのは、酉と戌にかけてのみであり、残りの9つの隣接する干支においては、性比の差は、イメージ通りの方向であった。

したがって、“Gender Schema”による説明は不当なものではないことが示唆された。

5. 最後に

ところで、以上の観察は、1899年から1986年にいたる間のものであるが、最近では、“Gender Schema”に合わせたと考えられる出生の届け出の調整は行われなくなったのであろうか。表1と表3において1971年以降の変化を見ると、差の大きさは小さくなっているものの、その方向は消滅する傾向には見えず、“Gender Schema”に沿っていると解釈することができる。

干支にまつわる古い言い伝えは、徐々に忘れられたり、合理的な考えにより駆逐される傾向があるかも知れないが、干支の男女イメージは抜き去りがたく残存しており、それが出生届けに微妙な影響を与えているのかも知れない。

さらに、月日別の出生性比データ、特に1月や12月のデータが入手可能になれば、干支の影響による親の出生届け出の調節に関して、より詳しく検討することが可能である。